源氏物語①～⑦　若紫

①日もいと（とても）長き（長い）に、つれづれなれ（所在なく退屈なので）ば、夕暮れ（時）のいたう（とても）霞み（霞む）たる（でいる）に（の）紛れて、かの小柴垣のもとに（お出かけになる）立ち出で（お）給ふ（お）。

②人々は帰し給ひて（になっ）、惟光の朝臣とのぞき給へ（になると）ば、目に入ったのは（ちょうど）西向きの部屋（を）ただこの西面にしも、持仏据ゑ（据え申し上げ）奉りて（を）行ふ尼（勤行するであったのだ）なり（なあ）けり。

③簾少し上げて、花（を）奉る（お供えしている）めり（ようだ）。

④中の柱に寄り（寄りかかって）ゐて（座っ）、脇息の上に経を置き（置い）て、

いと（非常に）なやましげに（苦しそうに）読み（読ん）ゐ（でいる）たる尼君、ただ人（は）と（普通の身分の）見え（思われ）ず（ない）。

⑤四十余（歳）ばかりにて（であっ）、いと（とても）白う（色白で）あてに（上品で）、痩せ（痩せ）たれ（ている）ど（けれど）、

⑥つらつき（頬の当たり）ふくらかに（ふっくらして）、まみの（目もと）ほど（辺り）、髪（が）のうつくしげに（きれいに）そがれ（切りそろえられ）たる（た）末も、

⑦なかなか（かえって）長き（長い）よりも、こよなう（この上なく）今めかしき（現代風で目新しい）ものかな（だなあ）と、あはれに見（しみじみとして）給ふ（御覧になる）。